

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	慈受和尚「擬寒山詩」：一百四十八首とその中の擬拾得詩について
Author(s)	鈴木, 敏雄
Citation	中國中世文學研究, 76 : 62 - 72
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054528
Right	
Relation	



慈受和尚「擬寒山詩」——一百四十八首とその中の擬拾得詩について——

鈴木敏雄

一
宋の慈受懷深和尚に「擬寒山詩」一百四十八首がある。そのうちの二十首は、『慈受懷深禪師廣録』にも附録されている¹⁾。

その一百四十八首本（高麗本、朝鮮刻本。なお、現行本は一百四十九首採録）は単行であり、慈受自身の序が付されている。更には清代の禪僧道独によって重刻がなされ、重刻本には、道独の序もある（序はともに後掲）。

慈受「擬寒山詩」一百四十八首中には、『廣録』に附録される二十首の他に、『廣録』中の「警世詩」や刀兵劫を詠む「戒殺偈」も「擬寒山詩」として採録されており、最終的には、慈受「擬寒山詩」はそれらを併せ、一百四十八首単行の形で流布通行させたものと考えられる²⁾。

この慈受「擬寒山詩」の特徴の一つは、その自序（後出）にもあるように、殺生を戒める詠を主とする。しかも、畜類の殺生だけに止まらず、道独の重刻「序」（後出）には明記されることになるように、その本来である、人をも含む生類すべての殺生を強く戒めるものとなっている。

それは、それを詠む慈受「戒殺偈」（後出）を「擬寒山詩」として輯録するに至る、その慈受の経歴と取り組みとも関係があるのではないかと考えられる所である。『五燈會元』卷十六等の伝によれば、慈受は先ず、あらまし次のような経歴を持つ。

慈受懷深和尚（一〇七七—一一三二）は、安徽省寿春六安の人で、俗姓は夏という。母の張氏が出家を許し、十四歳で割愛（恩愛の絆を断ち、煩惱を去る）、冠年に祝髮（剃髮）し、後四年、十八歳で方外に道を訪う（遊方を開始する）。

二十六歳の年（崇寧元年、一一〇二）、浙江省嘉興（嘉禾）の資聖寺に到り、雲門宗第七代尊宿長蘆（江蘇省儀徵長蘆寺）の崇信禪師（浄照）のもとに依って止まり、唐の良遂禪師が麻谷の宝徹禪師を訪い、二度門前払いを食らった公案を問われ、領悟するに至る。（後、浄照が長蘆寺に徙ると、寺の首座となる）。

北宋の徽宗の政和三年（一一一三）八月十日、慈受は揚州儀真太守の吏部季公釜の要請を受け、城南の資

福寺に錫杖を駐める。その間、彼は蒋山仏鑑禪師に遇う。後に徽宗が道教を崇奉し、資福寺を改めて神霄宮とした際（一一三〇―一一三九）、慈受は道友に挽留されるも（三年と七ヶ月で）寺を棄てて蒋山に往き、名単を西庵に掛け、仏鑑禪師の側で益（示誨）を請い、その縁で点化（自性の変化）を蒙り、終には「倩女離魂」（「離魂記」）の話を聞き、疑問が解消し、豁然として開けることとなる。

政和七年（一一一七）九月六日、要請を受け、鎮江の焦山（長江南岸ちかく江中に在り）に居を移し、四稔（年）を閲る。

宣和三年（一一二一）三月二十五日、皇詔に依り東京慧林寺の住持となる（慧林寺は開宝寺等とともに京師開封府に在り）。

靖康二年（一一二七）金が北宋を滅ぼす靖康の難に遭い（一一二六―一一二七）七月二十八日、慧林寺を辞し、天台山国清寺石橋を経ることとする。

その後、蘇州の靈巖（靈巖山寺）に徙り、「靈巖披雲臺十頌」（唐の湖南澧州葉山惟儼禪師を懷古する「懷葉山十詠」）を詠む。三年後（一一三〇）、詔あって再び蒋山に入り、数ヶ月も経たず、太湖内の包山（洞庭山・西山）に退隠する（王氏の要請に応じて圓覺第一祖となる）。

紹興二年（一一三二）四月二十日、安然と示寂す。世寿五十六歳、法臘三十六年であった。

因果応報を意味する「影響」という仏教語は、慈受の常套語でもあるが、この語を用いて慈受は、人の受ける三災の一つであり「殺生」の極みである「刀兵劫」の時期が、影の形に随い、響きの声に応ずるがごとく、殺生したことの因果応報として訪れると詠み、その起因となる殺生を強く戒める。

今、この「戒殺偈」（慈受詩007）を、慈受の企図に基づいて擬作詩と見る場合、後づけではありつつも、寒山詩との関係を踏まえて理解する必要が出てくる。

寒山も安史の乱に遭って荊州に避難したとは伝わるが、内乱の兵災を戒殺生の例に挙げるものは無く、外敵の刀兵に言及する寒山詩⁰⁸⁷が、一首がある。

去家一萬里 家を去ること一万里
提劍擊匈奴 劍を提げて匈奴を撃つ
得利渠即死 利を得れば渠即ち死し
失利汝即殞 利を失へば汝即ち殞る
渠命既不惜 渠の命既に惜しませず
汝命有何辜 汝の命も何かの辜有らん
教汝百勝術 汝に百勝の術を教へん
不貪爲上謀 不貪をば上謀と為せ

他人の命の死を惜しまないのであるから、自分の命も何らかの辜を得て殞ぶことになる、戦術（外道）としては仏説の三毒の一つである五欲の貪りをしないこと（「不貪」）によってのみ、因果応報を免れられる、と戒める。

今ここで、慈受がこの寒山詩の「匈奴」を北方異民族

殊に、靖康の役の際に東京（開封）慧林寺に居た慈受は、仏教に言う兵災による破壊期（刀兵劫）を目の当たりにしているものと考えられる。靖康二年から三年にかけて、東京は開封府東京留守の宗澤（一〇六〇―一一二八、靖康三年七十歳で憤死）が金に抗い城を守ってはいたものの、周辺は金兵に侵されている。慈受はその中を天台山經由で南方に避難する（ここで寒山拾得詩を再び見直す機会をも得ることとなったものと考ええる）。「戒殺偈」二首（其一是、「擬寒山詩」其七。以下、慈受詩007とする。其二是、慈受詩022。『3』）の制作年代は未詳であるが、慈受の右掲の経歴を勘案すると、この時期と符合するのではないか。

二

慈受詩007として一百四十八首中に収められている所の、『廣録』所載の「戒殺偈」其一是、「刀兵劫」を詠む。

世上多殺生 世上は殺生多く
遂有刀兵劫 遂に刀兵の劫有り
負命殺汝身 命を負て汝が身を殺し
欠財焚汝宅 財を欠きて汝が宅を焚く
離散汝妻子 汝が妻子を離散せしめて
曾破他巢穴 曾て他の巢穴を破りたり
影響各相似 影響各おの相似たり
洗耳聽佛説 耳を洗つて仏説を聴け

の金に比擬し、「命」の重視と「汝」への呼び掛けの手法を模倣対象として見れば、財や妻子への貪愛による殺生（後出の道独「序」に言う「生を貪る」）を戒める右掲の慈受詩007との類似点が見えてくるのではないか、因みに慈受は、071詩で「不貪は以て宝と為す、日び用うれば欠少無し」と言い、その「欠少」は百味などの貪りから起こるとする。兵災等の三災は、過剰な貪りの影響に因るとする論理構造である。

寒山の戒殺生は、056には「烹羊煮衆命、聚頭作淫殺。含笑樂呵呵、啼哭受殃抉」とあり、殺生をすれば終いには地獄に落ちると言う。他にも例えば、寒山詩⁰⁹⁵には、

噴噴買魚肉 噴々として魚肉を買ひ
擔歸餒妻子 担ひ帰つて妻子に餓はす
何須殺他命 何ぞ須あん他の命を殺し
將來活汝已 將ち来たつて汝を活かすのみなるを
此非天堂縁 此れは天堂の縁に非ず
純是地獄滓 純ら是れ地獄の滓なり
徐六語破堆 徐六は破れ堆に語りかけ
始知沒道理 始めて没道理なるを知れり

とある。「刀兵劫」が訪れるとは言わないものの、寒山のこの詠は、殺生したことの因果応報（影響）で地獄に落ちて後悔しても後は無いとする仏教哲学に基づく。他にも、寒山詩²⁰⁷は戒殺生を詠む。また、拾得詩⁰⁴にも、

養兒與取妻 兒を養ひて与に妻を取り
養女求媒娉 女を養ひて媒娉を求む

重重皆是業

重ね重ね皆是れ業なるに

更殺衆生命

更に衆生の命を殺す

聚集會親情

聚め集めて親情を会し

摠來看盤釘

摠べ来たりて盤釘を看る

目下雖稱心

目下心に稱ふと雖も

罪簿先注定

罪簿は先づ注し定められん

とあり、家族ぐるみで「衆生」（生類すべて）を殺生する食りを戒め、やはり殺生は終いには地獄に落ちるとしてゐる。拾得詩12も戒殺生を詠み、「殺他鷄犬命、身死墮阿鼻」とある。寒山拾得詩の、慈受のようには「刀兵劫」の訪れには言及しないものの、殺生すれば終いには地獄に落ちるとする、そのような因果応報説による詩偈の構築法は、慈受も擬していることが出来るように思う。少なくとも前掲の慈受詩007も、論理面はこれら一連の寒山拾得詩をも承けていると言つても好いのではないか。

前掲の慈受詩007と関連して、慈受詩019があり、次のように詠む。

忍人喜啖膾

忍き人は膾を啖ふを喜び

砧几膏血灑

砧几は膏血灑る

想見魚痛時

想ひ見る魚の痛き時

正似人遭冎

正に人の冎にんぎぎに遭ふに似たるを

咀嚼稱珍奇

咀嚼して珍奇と称し

惻隱略無也

惻隱略ぼ無きなり

影響恐非遙

影響は恐らくは遙か

不在九泉下 九泉の下に在らざるに非ざらん

これも刀兵には直接言及しないものの、まな板上の魚の傷みを、「正に人の冎にんぎぎに遭ふに似たり」と言い、人に対する酷刑と同一視する戒殺生を提示する論理構成になっている。これも右掲の寒山詩056や拾得詩04に類似させていると言え言えるのではないか。

慈受「擬寒山詩」は、自身が靖康の難に遭い、東京慧林寺から天台山国清寺に避難した際、改めて寒山拾得ゆかりの地と出会い、彼らの主要テーマの一つ「不食」を捉え、本来の人をも含む、貪りの影響を除く戒殺生を主体とする詠を作るに至ったものと考えられる所である。

三

「戒殺生」に関し、慈受二百四十八首の「擬寒山詩序」には、次の如くある。

慈受深和尚擬寒山詩序

慈受叟 懷深 述

寒山拾得、洒文殊普賢也。有詩三百餘首、流布世間、莫不丁寧苦口、警悟世人、種種過失、至於幼女艾婦之姿態、惡少偷兒之性情、斗秤欺瞞、是非品藻、靡不言之。其間稠疊言之者、誠殺生也。

詩言「寄語食肉輩、食時無逗留。今生過去種、未來今日修。祇取今日美、不慮來生憂。老鼠入飯瓮、雖飽難出頭。」又云「人喫死猪肉、猪喫死人腸。猪不道人臭、人反道猪香。猪死拋水裏、人死掘地藏。彼此莫相食、蓮花生沸湯。」

嗚呼、聖人出現、混迹塵中、身爲貧士、歌笑清狂、小偈長詩、書石題壁、欲其易曉、而深誠也。經云「若不去殺、斷一切慈悲種。」慈悲者、仁也。

余因老病、結茅洞庭、終日無事、或水邊林下、坐石攀條、歌寒山詩、哦拾得偈、適與意會、遂擬其體、成一百四十八首。雖言語拙惡、乏於文彩、庶廣先聖慈悲之意。建炎四年二月望日序。

（寒山拾得は、迺ち文殊普賢なり。詩三百餘首有り、世間に流布し、丁寧にして口を苦くし、世人を警悟せざる莫し、種々の過失は、幼女艾婦の姿態、惡少偷兒の性情に至り、欺瞞を斗秤し、品藻を是非し、之れを言はざる靡し。其の間稠疊として之れを言ふ者は、殺生を誡むるなり。

詩に言ふ「寄語食肉輩、食時無逗留。今生過去種、未來今日修。祇取今日美、不慮來生憂。老鼠入飯瓮、雖飽難出頭」と。又た云ふ「人喫死猪肉、猪喫死人腸。猪不道人臭、人反道猪香。猪死拋水裏、人死掘地藏。彼此莫相食、蓮花生沸湯」と。

あゝ、聖人出現し、迹を塵中に混ぢへ、身は貧士と爲り、歌笑は清狂、小偈長詩をば、石に書し壁に題し、其の易曉なるを欲するも、深く誡むるなり。經に云ふ「若し殺すを去らずば、一切の慈悲の種を断たん」と。慈悲とは、仁なり。

余老い病むに因つて、茅を洞庭に結び、終日無事、或は水辺林下にて、石に坐し条を攀ぢ、寒山詩を歌

ひ、拾得の偈を哦ひ、適たま意と会すれば、遂に其の体に擬し、一百四十八首と成る。言語拙惡にして、文彩に乏しと雖も、庶はくは先聖慈悲の意を広めんことを。建炎四年二月望日序す。）

茅を洞庭に結んだ建炎四年（一一三〇）二月十五日、とあるので、「擬寒山詩」は、慈受が晩年（靖康の役や天台山国清寺を経た後）、太湖内の包山（洞庭山。西山）に退隱して間もなく纏められたものであると考えられる。この文中に寒山詩070、269二首を引くように、擬作詩は『涅槃經』に「夫食肉者、斷大慈種」と言う所の戒殺生を主体とし、慈悲心（聖人の仁）を断たぬよう文殊普賢の和光同塵であるとされる寒山拾得の詩体に擬して、それを主張しようとしたことが分かる。

この一百四十八首を重刻した清の道独は、その主張を更に鮮明化し、「序」で次の如く言う。

重刻擬寒山詩序

清、道獨

佛言「若要世間無刀兵、除非衆生不食肉。」茲者三災並起、人命危脆、或募兵守城、或遁逃山林、或隱匿海島、以自爲計。雖貪生怖死人之常情、豈知定業有不可逃者。蓋殺生之極、感刀兵災、偷盜之極、感饑饉災、淫邪之極、感疾疫災。非天降、非地湧、非人與、皆衆生自業吸引、因果相酬、如影隨形、如響應聲。欲不受果、惟不造因、因亡則果喪、業空則報亡耳。

道獨偶閱慈受禪師「擬寒山詩」、見其詞語懇切、深錘痛札、今人通病、實對治之良劑。玩味不已、重梓流通、

伏冀諸賢詳審、起大慈心、悲愍衆生、不食其肉、齋戒清淨、謹救身心、衆善奉行、諸惡莫作。一人依之、一人不受業、衆人依之、衆人不受業。斯即善身保家壽國之良圖也。(清、道獨禪師『長慶宗寶獨禪師語錄』卷第八)

(仏は言ふ「若し世間に刀兵無きを要めば、衆生の肉を食はずんば非ざるを除れ」と。茲れは三災並びに起り、人命危く脆く、或は兵を募つて城を守り、或は山林に遁逃し、或は海島に隱匿し、以て自ら計を為す。生を貪り死を怖るるは人の常の情なりと雖も、豈に定業に逃るべからざる者有るを知らんや。蓋し殺生の極みは、刀兵の災ひに感じ、偷盜の極みは、飢饉の災ひに感じ、淫邪の極みは、疾疫の災ひに感ぜん。天の降すに非ず、地の湧くに非ず、人の与ふるに非ず、皆衆生の自業の吸引し、因果相酬ゆること、影の形に随ふがごとく、響きの声に応ずるがごとし。果を受けざらんと欲せば、惟だ因を造らざるのみ、因亡ければ則ち果喪はれ、業空なれば則ち報い亡きのみ。

道独偶たま慈受禪師の「擬寒山詩」を閲、其の詞語の懇切にして、深く雖もみ痛く割すを見れば、今人の通病は、実に対治の良劑なり。玩味して已まず、重ねて梓して流通せしめ、伏して冀はくは諸賢よ詳審らかにし、大慈心を起こし、衆生を悲愍し、其の肉を食はず、齋戒して清淨、身心を謹救み、衆は善く

奉行し、諸惡作す莫からんことを。一人之れに依れば、一人業を受けず、衆人之れに依れば、衆人業を受けざらん。斯れ即ち身を善くし家を保ち国を寿ぐの良図なり。)

人命が三災の一つ刀兵災によつて失われるのは、自らの死を恐れながらも生を貪り、慈悲心を断ち殺生食肉した因果によるとし、いわば自肉他肉は則ち是れ一肉であつて、衆生の殺生はならぬとの慈受の主張を、慈受の詩偈を踏まえた上で、道独は一層鮮明化し、一百四十八首中に採録される所の「戒殺偈」(＝慈受詩007)中の語である「刀兵」(仏教語の刀兵劫)を前面に出して重刻していることが分かる。慈受詩に内在しているものを判然と顕彰し、言葉にしていると云つても好い。

四

さて、前掲二で、寒山詩のみならず敢えて拾得詩を慈受の擬作対象の例に挙げたが、今、慈受一百四十八首各首の原詩を寒山詩の中に見出だしてみると、例えば以下の数首は、一見してすぐにそれと分かる(次の「慈000↑寒000」は、慈受詩一百四十八首の000番の詩は、寒山詩000番を原詩としていることを意味するものとする)。

慈000↑寒141、慈021↑寒070(序に引用されている)、
慈(二十首の其三)↑寒253、
慈1034003↑寒141、慈021↑寒070(序に引用されている)、
慈(二十首の其八)↑寒300、慈065↑寒240、
慈066051034003↑寒105、慈071↑寒245、慈088↑寒194、

不覺子孫生 覺えず 子孫生まれ
婚嫁未曾住 婚嫁未だ曾て住まらず
閉門造姪殺 門を閉ざして姪りに殺すに造るは
也好思量取 也た好し 思量し取るに
と詠む。これは、拾得詩12、

男女爲婚嫁 男女婚嫁を為すは
俗務是常儀 俗務是れ常の儀なり
自量其事力 自ら其の事力を量れば
何用廣張施 何ぞ広く張施するを用みん
取債誇人我 債を取つて人か我かを誇り
論情入骨癡 情を論ずれば骨に入りて痴なり
殺他鷄犬命 他の鷄犬の命を殺せば
身死墮阿鼻 身死して阿鼻に墮ちん
を原詩とする。

「婚嫁」をはじめ「常」「量」「取」等の共通語彙の使用によつてもこの拾得詩12が原詩であると分かるが、擬作の結句「也好思量取」は、慈受詩147に「暴殄天物多、也好自思量」とあるのと同じく、殺生の因果応報(破戒後の善行と読経による悔悛を含む)について考えさせられるのは尤もの意と取れ、原詩の結句「身死墮阿鼻」と同じ意となるのではないか。婚嫁による過剰の貪りによる、慈悲の種を断ち地獄に落ちる殺生が繰り返されることを戒める詠となっている。

慈(二十首の其十七)↑寒2019、慈093↑寒214、
慈1000089(二十首の其十五)↑寒262019、慈113↑寒240、
慈1231231↑寒286、慈132↑寒086、慈139↑寒250、慈141↑寒262、
慈144↑寒135286、
そして、これら原詩を特定する際に気づくことは、慈受「擬寒山詩」に於ける一つの特徴として、他の禪僧のそれと比べ、拾得詩を原詩とするものが比較的多いと思えることである。一見してすぐにそれと分かるものとしては、次のような数首が挙げられる。

慈27↑拾12、慈045↑拾24、慈096↑拾43、慈119↑拾03、
慈129027↑拾08、
『廣録』に附録する二十首中には、拾得詩を原詩とするものは見られない。それは、採録されていないからであるが、それが一百四十八首中には何首か見出される。)

「擬寒山詩」の中で、敢えて拾得詩を原詩とする意味は何か。拾得詩自体が寒山詩の模倣であり、寒山詩と拾得詩とを区別する必要はないと見ればそれまでではあろうが、拾得詩の擬作には、ある種の傾向が見られる。

a

例えば、慈受詩027は「婚嫁」を模倣対象とし、
一翁生七兒 一翁七児を生み
各房納一婦 各房一婦を納む
親賓常有歡 親賓常に歡ぶ有れば
鵝鴨殺無數 鵝鴨殺すこと無數なり

b

また、例えば慈受詩 045 は「羊」を模倣対象とし、次のように詠む。

猪羊養一羣 猪羊は養ふこと一羣
鷄鵝不知數 鷄鵝は数を知らず
準擬賓客來 賓客の來たるに準擬し
旋殺供盤箸 旋ち殺して盤箸に供す
烹羊猪已驚 羊を烹れば猪已に驚き
割鷄鵝已懼 鷄を割けば鵝已に懼る
從頭喫至尾 頭より喫ひて尾に至り
不知何以故 何を以ての故かを知らず

この擬作は、拾得詩 24、

躑躅一羣羊 躑躅たり一群の羊
沿山又入谷 山に沿ひ又た谷に入る
看人貪博塞 看人は博塞を食れば
且遭豺狼逐 且く豺狼の逐ふに遭ふ
元不出孳生 元より孳生に出でざれば
便將充口腹 便ち將に口腹に充てんとす
從頭喫至尾 頭より喫ひて尾に至り
納餉無餘肉 餉々として餘肉無し

を原詩とする。この拾得詩では、羊が豺狼に食われてしまふのは、番人が博打に耽るといふ生を食ふからだとし、また豺狼から見れば羊は自らが生み育てたのではないから口腹に充てるのだとする。自肉と他肉は一肉と見ることに気づけない無慈悲の殺生を詠んでいることになる。慈受詩も原詩と同様に、羊が人に食われてしまふのは、

傷嗟愚癡人 傷み嗟くは愚痴の人
貪愛那生獸 貪愛して那ぞ厭ふを生ぜん
一墮三途間 一たび三途の間に墮ち
始覺前程險 始めて前程の險しきを覚ゆ
を原詩とする。押韻のほか、「愚癡」をはじめ「手」「珠」「慧」「劍」「無明」「貪」等、多くの共通語彙が見られ、明らかに擬作と原詩との関係を醸成している。
拾得は寒山とともに常時「毎談今古事、嗟見世愚癡」ということをしているが、慈受も、これに参加しようとする。三毒（貪、嗔、癡）のうち、愚痴のまま生を貪愛しては無明を除けず、因果相応じて地獄に墮ちるとし、早々に智慧を働かせるよう戒めるに至っている。

d

また、慈受詩 119 は「出家」の「清閑」を模倣対象とし、
出家要清閑 出家は清閑なるを要するも
却被人使喚 却つて人に使喚せらる
門徒數百家 門徒數百家なれば
追陪日忙亂 追陪せられて日び忙乱す
施利得十千 施利をば得ること十千にして
人情費七貫 人情をば費やすこと七貫なり
彼此沒便宜 彼此便宜没く
他年難打算 他年打算し難し
と詠む。これは、拾得詩 03、
出家要清閑 出家は清閑なるを要し

世間の人はそれを養つておきながらも、やはり自肉と他肉は則ち是れ一肉に気づかないことに因るとしつつ、それが分かっていないことを詠み、結句のように問いを投げかけた形で結ぶ。（略すが、慈受詩 073 では羊とその兎との関係を、人の翁とその兎との関係を同じであると明言している。）

慈受は「賓客」すなわち人を原詩の「豺狼」と同様に看做していることが分かる。拾得の比喻表現を解釈し、直叙の形にしている。

c

また、慈受詩 096 は「愚痴」を模倣対象とし、
貪嗔汝鑊湯 貪嗔は汝が鑊湯
愚癡汝地獄 愚痴は汝が地獄なり
劍樹及刀山 劍樹及び刀山は
汝心皆具足 汝が心に皆に具足す
要以智慧水 要は智慧の水を以て
洗此無明毒 此の無明の毒を洗へ
凡聖路無多 凡と聖の路は多かる無し
正如手翻覆 正に手の翻覆するがごとし
と詠む。これは、拾得詩 43、
左手握驪珠 左手は驪珠を握り
右手執慧劍 右手は慧劍を執る
先破無明賊 先づは無明の賊を破れば
神珠自吐燄 神珠は自ら焰を吐かん

清閑即爲貴 清閑なれば即ち貴しと爲す
如何塵外人 如何ぞ塵外の人なるに
却入塵埃裏 却つて塵埃の裏に入るや
一向迷本心 一向ら本心に迷ひ
終朝役名利 終朝名利に役せらる
名利得到身 名利身に到るを得れば
形容已顛顛 形容已に顛顛す
況復不遂者 況んや復た遂げざる者の
虚用平生志 虚しく平生の志を用うるをや
可憐無事人 憐れむべし無事の人
未能笑得尔 未だ爾を笑ひ得る能はず
を原詩とする。この拾得詩と同様、慈受詩も出家者が「清閑」に徹し切れず、平生の「人情」に七割がた執らわれ、要らぬ名利を得てしまふ笑えない危うさを戒めている。

e

さらに、慈受詩 129 は「這箇の意」を模倣対象とし、
白日鬧喧喧 白日は鬧がしきこと喧々と
夜間靜悄悄 夜間は静かなること悄悄たり
夜間與白日 夜間と白日と
且道誰欠少 且く道はん誰か欠少すやと
飢時覓飯噉 飢うる時は飯を覓めて噉ひ
困便尋床倒 困るれば便ち床を尋ねて倒る
不省這箇意 這箇の意を省みず
區區直到老 區々として直ちに老いに到る

と詠む。これは、拾得詩⁰⁸、

嗟見世間人 嗟きて見る世間の人の

永劫在迷津 永劫迷津に在るを

不省這箇意 這箇の意を省みず

修行徒苦辛 修行して徒らに苦辛す

を原詩とする。この拾得詩が、世間の人が「這箇の意」すなわち仏法の意味も分からずに修行する様を繪して、「在迷津」と言っている所を、慈受は「迷津」の中に居る「世間」の人を具体化し、昼間は騒がしく夜は静かであるが、夜は人が誰か居なくなるのかと道えば、昼間は腹が減って暴飲暴食してまわり、夜は疲れて睡眠を貪っているだけだと詠み、人々は本源である仏性を見失い、そんな迷いの中で老いて行くと捉えて見せている^[3]。

以上、これらの擬拾得詩は、寒山詩の特徴である山居詠等ではなく、すべて迷いに在り生を貪愛する者の如何とも仕難さを戒める、禅僧好みの仏教勸戒詩であることが分かる。

五

慈受はなぜ右掲四の a s e のような拾得の仏教勸戒詠に多く擬することをしたのか。

『寒山拾得詩校評』著者の錢学烈女史は、同著の「前言」五「拾得与拾得詩」に於いて、拾得は十歳の時に豊干に拾われ、天台山国清寺に連れて来られ、その後、寒山子が寒岩に引き取ったとのエピソードに依って、拾得

の境遇や経歴は寒山とは異なるとし、先ず、拾得詩として現在遺っている五十餘篇のうちの何首かは寒山子の模倣であり、かつ寒山子の詩が混じっている可能性があると言う。そしてその上で、寒山子の境遇や経歴であつて拾得のそれとしてはそぐわないものを除くと、「寺僧」としての三十數篇の仏教勸戒詩が残るとする。

すなわち、「地獄の懲罰を用いて人に悪を棄て善に従うことを勧める」もの、「殺生食肉を戒める」もの、「出家しても戒規を守らず或いは真心修道しない僧人に対して、また告誡を提出する」ものが、拾得詩特有の特徴であろうと、錢氏は言う。そして、「拾得の勸戒詩は基本的にすべて佛教頌偈體であり、且つ多くは閻王や地獄を以て懲戒と爲し、生動たる形象の文學的色彩を缺いている。還た幾首かの禪理詩が有り、自性の妙體を喩えて明月あるいは水精のごとしと成すも、禪境と禪趣を談り上げてはいない。」と結論づけている(以上、論者の要約による)。

この見解は、極めて妥当性が有るものと考えられる。というのは、慈受が擬している前掲四の拾得詩が、まさに錢氏の指摘する拾得詩の特徴と全て合致すると考えるからである。(錢氏は、「拾得の山水詩は多くない」とも言う。確かに慈受「擬寒山詩」中の山水詩も、拾得ではなく、寒山子の山居詩に擬したものが殆どである。)

すなわち、慈受が前掲四の a s e のような、より禅僧に近似した論理展開をすると言ひ得る「寺僧」拾得の戒規詠に多く倣っているのは、禅僧として破壊期の「刀兵

劫」を目の当たりにし、寒山拾得詩中の仏教哲学「不食」による「戒殺生」を強く主張し表出し得る「佛教頌偈體」の詠こそ望ましいと見、それを志向したからではないのか。それらは、殺生をはじめ、貪嗔、名利、迷いに執らわれ続ける者の、生を過剰に貪愛する因果応報の果て(刀兵劫もその一つ)への戒めの論理を僧侶の立場から詠み、それを表現できる体を見せている。慈受は、そのような寒山拾得詩の戒殺生(因果応報)の論理を模倣対象とし、それを自分のものとして表現しようとしたと見たい。

そのような慈受の企図は、前掲の清の道独の重刻の序が、仏の言葉を用いて慈受の主張を鮮明にし、「若し世間に刀兵無きを要めば、除非だ衆生は肉を食らはざるのみ(若要世間無刀兵、除非衆生不食肉)」と言っていることとも合致しよう。

注

[1]拙論「慈受和尚『擬寒山詩』二十首について」(中國中世文學研究)第59号 二〇一一 中國中世文學會)に於いて、その「韻度」ということに関しては論じた。なお『廣録』は、陳曦點校(二〇一五 上海古籍出版社 雲門宗叢書所収)がある。

[2]劉克莊『後村詩話』に「慈受一僧爾、所擬四十八篇、亦逼眞可喜也」とあるのは、「一百四十八篇」の誤りか。

[3]慈受「擬寒山詩」一百四十八首を、其一から順次慈受詩001〜149とするものとする。実際は一百四十九首ある。寒山拾得

詩も同様、錢学烈『寒山拾得詩校評』(一九九八 天津古籍出版社)の歌番号に依り、寒山詩001〜とする。

[4]語法として、『有何』は、何か有るなり。『有何』は、何ぞ有らんや、無きなり」と解するものとする。地獄に落ちる等の事が有ると見たい。(『用字格』は、『孟子』の「自責不知己有何罪耳」を引用し、『有何』は、何の罪あるなり。『有何』は、何ぞあらんや、なきと云ふことなり。差別分明」と言う。)

[5]道独(一六〇〇〜一六六一)は、清代の禅僧、俗姓は陸、宗宝と号す、別名空隱、南海(廣州)の人。

[6]「中國中世文學研究」第59号の拙論に於いて、慈受二十首の其十五中の「省縁」を「縁を省く」と訓じたが、「縁を省みる」と訓ずるべきであること、ここでの訂正をお許し願いたい。「縁」に関して省悟省察する意とすべきところである。なお、慈受には「省縁」詠六首がある。

[7]「這箇意」は、寒山詩¹⁰⁵、²⁵⁵に言う「箇中意」に同じと見たい。また、この詩は修行の在り方を問う寒山詩⁰⁷⁴をも踏まえていよう。